羽化時期に渓流沿いの杉の幹に羽化殻を見つけたときは，うれしさで舞い上がってしまった．成虫の行動観察では，和田山中学校科学部の生徒たちに糸井渓谷の主な出現場所に立ってもらい，同時に目撃個体の数や時刻・行動等を記録した．幼虫と産卵痕の確認は，出現期間の短い成虫に代わり，生息場所の確認に大変役立った．とりわけ，幼虫期間が約６年間と長いため，さまざまな齢の幼虫が年間を通して生息しており，但馬での生息状況を把握するのに大変有効であった．幼虫を中心とした調査を重ねるにつれ，ムカシトンボは但馬各地の山間渓流にごく普通に生息していることが分かってきた．調査は大変だったが，ムカシトンボへの情熱が私を行動させた．私の頭の中にムカシトンボが棲んでいたのだ．

しかし，残念なことに糸井渓谷に1989年に巨大な砂防ダムが建設された．ムカシトンボの成虫が多く飛び交っていた国指定の天然記念物であるカツラの木の100mばかり上にである．この工事のために成虫の往来する渓流もコンクリート２面張りの水路となり，岸辺に生えていた多くの植物が姿を消した．

（３）トンボ全般へ興味が広がる

いつものように糸井渓谷でムカシトンボの調査をしていたある日，関西トンボ談話会の東輝弥氏に偶然出会った．彼は「人と自然の博物館」に標本展示するムカシトンボの採集に来られたとのことであった．今年は兵庫県北部（但馬地方）に焦点を当てトンボ調査を行っているので，入会し調査活動に参加しないかと誘ってくれた．トンボ全般については全く知らない私であったので，次の調査会から参加した．

私のトンボ狂いに拍車をかけたのが，この談話会である．本当に，トンボを愛する人々の集まりであり，そのエネルギーはすごいものである．成虫・幼虫・産卵痕・羽化殻・卵を採集する人，それぞれが専門家である．採集は全くせず，写真だけを撮っている人もいる．行動を共にするだけで，多くの知識を与えられたり刺激を受け，元気が出た．その後，但馬各地の山間渓流だけでなく，河川・池・湿地などに出かけることが多くなり，私の活動はトンボ全般の成虫や幼虫の採集に移った．

こんな折，トンボに関する大変良い本が出版された．『日本産トンボ幼虫・成虫検索図説』（東海大学出版会）である．この本の登場によって，幼虫・成虫の種の検索が容易にできるようになった．嬉しい限りである．さらに，1996年には北海道大学出版会から，新しい図鑑が出版される予定である．今から楽しみである．

最近，ムカシトンボから少々遠ざかってしまった．渓流を訪れることより，但馬各地の池を訪れることの方が多くなった．ヒヌマイトトンボの調査で円山川下流域の河川や池を頻繁に調査した．その後，体調を崩し２年間は何もできないでいる．元気になったら，出石川のキイロヤマトンボの調査をしたいと思っている．

昆虫採集との出会いから現在まで

黒井　和之

昆虫採集をするようになったのは，中学１年生の夏休みに入って間もない頃だったように思う．そのきっかけとなったのは，近くに住む一人の上級生がネットを持って裏山の草地で蝶を採集していたのに刺激されたことである．その頃は，毎日のように自然を相手に野山を駆け回っていた時代であった．その行為自体がそれまでになかった新しい遊びのようにうつり，興味半分と夏休みの宿題（課題）だった自由作品を作ることを目的に，同じ集落に住む遊び仲間たちと採集するようになった．

その当時に使っていた採集用具はまったく粗末なもので，ネットは魚を捕るタモにシーツを縫いあわせてなんとか蝶を採集できるように手作りをした．三角紙は普通の紙，展翅板も手作り，標本箱にいたっては既製の紙箱だった．それらすべてが身のまわりにあった有り合わせのもので，当時はそれが普通で，それらが市販されているなど考えもしなかった．図鑑だけは作りようがなかったので，保育社から出版されていた原色図鑑を買ったのが２年後だったと思う．それまでは種名の同定などは仲間たちからの知識に頼っていたようで，何もわからずただやみくもに採集していたようだ．

１年目の採集は夏休みの７～８月の２カ月だけで，おもにアゲハ類やそのころ多かったタテハチョウ科のヒョウモン類などを採集していた．２年目の早春に仲間のひとりから紙に包まれたコツバメを見せられたときは，季節を変えればこんな種類も採れるのかと軽いショックを受けた．このとき，蝶のなかには年１回春にだけ出現する種がいることを知り，家の裏山でコツバメを，またネギの花に来ていたウスバシロチョウをいくつか採集した．

高校に進学する頃になると，それまで一緒に採集していた仲間たちは皆やめてしまっていて，その後はだんだんと興味が薄らいでしまい採集することが少なくなってしまった．その当時の標本やラベルは今ではまったく残っていないが，それまでの３年間で自分の住む集落周辺

だけで30数種の蝶を採集していたようだ．今から考えるとごく普通種ばかりであったが，そのなかで特に印象深く残っているのがトラフシジミとメスグロヒョウモンである．トラフシジミはフジの生えた墓地で初めて採集した．ネットから取りだし手に摘むと，太陽光線によって翅表の青い光沢がキラキラ輝き，こんなきれいな蝶がいるのかと感激をした．また，尾状突起のあるシジミチョウの採集も初めてだったので，満足感でいっぱいになった思い出がある．メスグロヒョウモンは，近年ではまったく見かけなくなったが，その頃は裏山のちょっとした草地にいろんなヒョウモン類が数多く棲息していて，その中にごく稀ながら見ることができた．初めて採集したときは，他のヒョウモン類に混じって黒地のおかしな蝶がいるなという印象をうけたものだ．あとでこれがメスグロヒョウモンの雌であることを知り，雌雄の極端な斑様の違いにはびっくりしながらも，生物のもつ神秘的な魅力と世代を残していくための多様性を少しは考えさせられた．

採集をしなくなった頃に，隣家の庭先と裏山の中腹でギフチョウを複数目撃している．これが本種との最初の出会いである．早春のうららかな日和のなかを弱々しげに飛翔する光景は，図鑑の解説にあった「春の女神」という呼び名がぴったりで，今でもその時のことはよく覚えている．また，図鑑のなかで宝石のように光輝く「ゼフィルス」は憧れの存在だったが，その当時，集落周辺の低山地では見ることもできず，自分の住む町に生息しているなど夢にも考えなかった．

高校を卒業して社会人となり，あるメーカーに就職した．再び故郷に帰ったのが，1980年だった．その翌年の1981年には採集を再開しているのだが，そのへんの記憶がはっきりしない．たぶん自宅に落ち着いて，気持ちに余裕ができたのがひとつ，もうひとつは部屋を整理していて，以前に採集して紙箱に入れていた蝶の標本が虫に食われて無惨な姿になっているのを見ているうちに，もう一度やってみようという気になったのが動機のように思う．そんなとき百貨店の文房具売場で簡単なスプリング式のネットを見つけ，採集用具が市販されていることを知ったが，それ以外の三角紙などは手に入れる方法を知らなかった．

ある日，仕事の途中に立ち寄った書店で自然科学のコーナーをのぞくと，各種の図鑑類や昆虫のことを書いた新刊本，それに「月刊むし」が並べてあった．これらを目の前にして，やっと自分の探し求めていた物にめぐりあえた喜びで頭がいっぱいになり，ワクワクする気を抑えて，とりあえず蝶の生態図鑑と「月刊むし」を買った．この専門誌によって，いろんな採集用具や標本箱などが市販されていることを知り，早速ネットやつなぎ竿などを購入した．この時から半人前ながら本格的な採集を始め，それが現在までつづいて生活の一部を占領するような趣味となっている．

当会の存在は，1982年６月発行の新聞の地方版に「ギフチョウ激減」という記事のなかで知り，早速事務局をしておられた木下氏に連絡を取り，入会した．その後日には氏のお宅を訪れ，きれいに展翅された蝶の標本を見せて頂き，その数の多さ，種類の多さに唖然とさせられた．その中でも，目をひいたのはゼフィルスの入った標本箱で，とくにヒサマツミドリシジミやアイノミドリシジミの仲間の黄緑色に輝く雄．赤や青の紋の入った雌の美しさには格別の感じを受けた．自分でもその時にはハヤシミドリシジミやエゾミドリシジミなど数種を採集していたのだが，こんなに多くの種が但馬に生息しているとはそれまで考えもしなかった．氏のコレクションによって大きな刺激を受け，いつの日か自分もこんな標本を持ちたいものだと胸を熱くしたのを今でも思い出す．

その後は総会や採集会などの催しには欠かさず出席して，多くのむし仲間にめぐり会え，いろんな意味で強い刺激を受けている．また，車を持つようになってからは採集地にも簡単に，それも短時間で行けるようになり，行動範囲も大きく広がり，標本も年ごとに増えていった．念願であったゼフィルスも飼育して完全な標本を作ることを知り，但馬に生息する種はある程度標本箱に収めることができた．

そんな経緯があって現在に至っているが，最近では仕事が忙しくなって採集に行く時間的余裕が少なくなってきている．また，何事につけ浅く広くの性格が災いして，最近では蝶よりも雑甲虫の採集に興味が移りつつあるのも事実である．しかし，但馬の蝶も草原性の蝶に代表されるように，減少傾向にある種がいくつかあるし，最近ではイシガケチョウのように南から分布を広げ，新しく仲間入りする種があり興味が尽きない．これからも「但馬の恵まれた自然」のなかで気楽に昆虫採集を楽しんで行きたいと思う．